

Quintet 投資

～新たなグループ型投資の提案～

麗澤大学 経済学部	織田 一也
〃	鎌塚 陸矢
〃	高嶋 君征
〃	町田 海
〃	羽根田 洸太

わが国の抱える問題点の1つとして、株式や投資信託などへの有価証券投資が少ないという問題がある。また、少子高齢化が進む中で、「老後資金の2000万円不足問題」なども注目されており、長期的な資産形成が求められている。こうした問題があるにも関わらず、証券投資をする人は少ない。なぜ、投資をする人が少ないのだろうか。大学でアンケートを実施したところ「きっかけがない」ことが投資をしない大きな理由となっていることが分かった。そうであれば、投資を始めるきっかけになるような仕組みがあればよいのではないだろうか。「一人では投資を始められない」のであれば、複数人で行うことができる「グループ型投資」の仕掛けを提供すればよいのではないかと考えた。調べたところ、グループ型投資の仕組みとして、すでに「投資クラブ」がある。これは、米国発祥の仕組みであり、資金を集めて話し合いをした上で投資先を決定するものである。ただし、グループの決議により投資先を決めるため、自主性が損なわれるなどの限界がある。

このため、我々は「**Quintet** 投資」という新たなグループ型投資を提案する。**Quintet** 投資では、5人組のグループを作り、同額を共同口座に資金を拠出し、自分で投資先を選んで運用をした後に、決算時には収益を合算する投資の方法である。グループの組成には、マッチングアプリを用いる。これは、マッチングアプリを使うことにより、①効率的にグループを組成することができること、②北海道や沖縄など、地域を問わず参加できること、などによるものである。**Quintet** 投資では、少額での投資を可能とするため、1株単位で株式が売買できる「ミニ株」を利用する。またアプリの付加機能として、「チャット機能」「メンター機能」「ランキング機能」「金融学習機能」などの機能を付ける。

Quintet 投資では、グループで投資を始めることにより、投資初心者に投資のきっかけを作ることができる。また、ミニ株を使うことにより、少額で投資を始められる。グループ内で相談はするが、あくまで自分で選んだ銘柄に投資を行うことでノウハウを得られる。決算時には、全員の損益を合算することで、分散投資の効果を得られるというメリットがある。このように、投資の経験が少ない人でも、気軽に投資に挑戦することができる仕組みとなっている。

最後に、**Quintet** 投資が普及すれば、参加者は資産形成に向けたノウハウを習得し、長い目でみて老後資金の確保につなげることができる。また、**Quintet** 投資を運営する証券会社は、投資初心者が本格的な投資家に育つことにより、将来の顧客の増加に結び付けることができる。最後に企業は、投資家が増えることによって、より資金が調達しやすくなる。このように **Quintet** により、投資家、証券会社、企業の3者が良い方向へ向かう「三方よし」の明るい未来の実現へ向かうものと考えられる。

1. 過少投資と年金問題

現在のわが国の抱える問題点の1つとして、株式や投資信託などへの有価証券投資が少ないという問題がある。家計の金融資産のうち、現金・預金が5割以上を占めており、証券投資の割合は、わずか15.7%にすぎない。海外と比較しても、証券投資の割合は、米国が55.2%、ユーロエリアが29.6%となっているのと比べると、日本の投資の少なさは明らかである（図表1参照）。

金融庁では、こうした投資の不足に対して、2003年から「貯蓄から投資へ」というスローガンを掲げて、NISAの導入などにより、証券投資に資金を振り向けるように国民を促してきた。しかし、こうした政府の投資促進策にもかかわらず、実は2003年から2020年にかけて、家計資産に占める証券投資の割合は13.7%から15.7%へとほとんど変わっていないのが実態である。

わが国の将来を考えると、こうした家計部門の証券投資の不足は、深刻な問題であるとみられる。今後、少子高齢化の進展により、「年金問題」が発生するとみられるためである。つまり、人口構成の変化により、今後は、少ない現役世代で多くの高齢者を支えていくことが必要となるため、公的な年金制度が持続可能かどうかを疑問視する見方が強まっている。また、現行の年金制度についても、老後の暮らしには必ずしも十分ではないことが指摘されている。これを明らかにしたのが「老後資金の2000万円不足問題」である。これは、金融庁が2019年に公表した報告書の中で指摘されたものである。モデル例（夫65歳以上、妻60歳以上）の年金受給額と平均支出から、毎月の年金の不足額（赤字）を約5万円とし、これが老後に30年間続くと、約2,000万円が不足することを示す試算であり、マスコミでも広く取り上げられ、大きな社会問題となった。

このように、将来の年金制度の持続性への不安や年金の不足が見込まれる中で、国民に求められるのは、証券投資によって長期的な資産形成を行っていくことである。超低金利が続く中で、0.002%（メガバンク、1年定期）といったほぼゼロ金利の預金に資産の多くを振り向けていては、いつまでたっても老後に向けた資産は増えて行かない。実際、証券投資の割合の高い米国や欧州では、個人の金融資産の増加率が、日本よりもかなり高いことが明らかになっている。

特に、こうした年金問題の影響を強く受けるのが、いまの若年層である。中高年齢層は、現行の年金制度が維持されるうちに「逃げ切れる」可能性が高い一方で、年金給付額の減額などの「ツケを払う」のは、今の20～30代の若年

層になるものとみられる。このため、われわれの世代は、将来に備えて、証券投資により長期的な資産形成を行っていく必要があるのである。

2. なぜ証券投資を行わないのか？

こうした問題があるにもかかわらず、なぜ、証券投資が少ないのであろうか。そこで、その理由を調べるために、当大学内で金融論の履修者（176人）を対象にアンケート調査を実施した。まず「今までに証券投資を行ったことがあるか」を尋ねると、95.5%が「投資経験なし」との答えであり、投資の経験があるのはわずか4.5%であった。次に、投資を行ったことがない人に「投資をしない理由」を聞いたところ、26%が「きっかけがないこと」、25%が「投資の知識がないこと」、20%が「投資をするお金がないこと」と答えた（図表2参照）。

こうした「投資を行わない3大要因」のうち、我々は「きっかけがないこと」という第1位の理由に注目した。きっかけがなくて投資が始められないのであれば、何らかのきっかけを作ってあげれば、投資を始めることにつながるのではないだろうか。そして、「一人では投資が始められない」のであれば、「複数人（グループ）で始める仕組み」を作ればよいのではないかと考えた。一緒に走る仲間がいれば、ジョギングを始めやすくなるのと同じように、一緒に投資をする仲間がいれば、楽しみながら、投資を行うことができるのではないだろうか。

3. グループ型投資の必要性

こうした問題意識の下、グループで投資を行う仕組み（グループ型投資）について調べたところ、米国を中心に「投資クラブ」という仕組みがあることが分かった。この投資クラブは、「複数人の個人投資家が資金を出し合い、合意に基づいて証券投資を行い、収益を分け合う組織」である。この投資クラブは、利益の追求が主な目的であり、定期的に会合を開いて銘柄選定などを行い、金融や投資の学習を行うこととしている。投資クラブが投資を行うまでの手順をみると、「メンバーを集める」→「代表などの役割を決める」→「EIN（雇用者識別番号）をIRS（内国歳入庁）から取得する」→「目標・目的を決定した後投資を行う」といった順序になる（図表3）。

この投資クラブには、①投資に関する知識の習得ができること、②資金を出し合うため小口での株式投資が可能になること、③分散投資ができること、④投資クラブが主催するセミナーによって、企業との対話や金融情勢についての

情報が得られること、などのメリットがある。一方、投資クラブのデメリットとしては、以下のような点が指摘できる。第1に、グループを組成する際に、メンバーを自力で集める必要があることである。近くに証券投資に同じような興味を持つ人がいないと、まず第1歩であるグループの組成が難しい。第2に、グループ内での役割決めがあることである。会計、書記などの役割分担は、投資の初心者にとっては億劫に感じてしまう場合が多いと考える。第3に、決議制で投資先を決めるため、自分の投資をしたい銘柄に投資をすることができない場合が出てくる。声の大きい人や多数の意見に従ってばかりであれば、自分の頭で考えた自主性のある投資判断にはならない。以上のようなデメリットの存在から、これまでの投資クラブのやり方には、一定の限界があるものと考えた。そこで以下では、投資を始めるきっかけとなる新たなグループ投資の仕組みを提案することとする。

4. Quintet 投資の概要

我々が提案する新たなグループ型投資は「**Quintet 投資**」である。この **Quintet 投資** は原則 5 人組のグループを作り、メンバーが同額の投資額を出し合い、各々が自分の拠出した金額について独自で運用を行い、一年後を決算日とし、そこで出た各々の損益を 5 人で合算し、それを分配するという仕組みである。投資クラブとの大きな違いは、投資資金の運用方法、自主性、グループの組成方法、などである。

まず、投資資金の運用方法についてみると、投資クラブでは、グループの決議によって投資先を決めるが、**Quintet 投資** では、共同口座に同額の資金を出し合ったうえで、各々の考えで自己資金の運用ができるようにする（図表 4）。この運用方法により、投資クラブのデメリットである「決議制のため、個人の意見が反映されない」という点を解決することができ、自分の判断によって思い通りの先に投資を行うことができる。このため **Quintet 投資** では、他のメンバーに任せきりにしたり、多数派の意見に従っているだけ、といったことはなくなり、「自主的な投資」を行い、実践的な投資のノウハウを積むことができる。次にグループの組成については、主たるターゲットである若年層が得意とするスマートフォンのアプリである「マッチングアプリ」を使ってグループの組成を行う。これにより、投資クラブのデメリットである、グループの組成が困難であるという課題を解決する。なお、共同口座やアプリといった **Quintet 投資** の仕組みは、証券会社が提供するものとする（証券会社にとって、顧客の開拓につながる）。

実際に Quintet 投資の流れをみると、まず、原則 5 人組のグループ（人数については多少の増減を許容する）をマッチングアプリによって作成する。次に、各々が共同口座に同額を入金し、グループで話し合いを行ったうえで、しかし最終的には自分の判断で投資先を選択し、投資を行う。そして、1 年後を決算期として損益合算を行う。最後にグループ全体の損益を 5 人で分配する。損益合算を行うのは、分散投資の効果をを得るためである。損益合算の例として、2 人がマイナス 1,000 円の結果を出したとしても、他の 3 人がそれぞれプラス 1,000 円、2,000 円、4,000 円の結果であれば、5 人の平均収益は +1,000 円となる。このように一部のメンバーに損失が発生しても、他のメンバーの利益と打ち消し合って、投資結果は安定することになる。このように、投資の自主性は確保したうえで、分散投資によってリスクを減らし、少額での投資を体験できるという仕組みを目指している。グループ投資という形で、投資のきっかけを作りつつ、グループ内での意見交換も踏まえて、楽しんで投資の経験を積むという意味では、魅力のある仕組みになるものと考えた。

5. Quintet 投資の機能

Quintet 投資は、グループ型の投資であるため、まずグループ作りを行う必要がある。このグループ作りには、マッチングアプリを活用することが最適であると考えた。これは、Quintet 投資の主たるターゲットは、投資経験の少ない若年層であることに加え、若年層ではスマートフォンを必ずといってよいほど所有しており、またアプリの利用にも慣れているためである。また、マッチングアプリを利用することにより、①投資クラブでは課題となっていたグループ作成を容易に行うことができること、②アプリには様々な機能を付けることができること、③ネット上でのやり取りとなるため、北海道や沖縄など、日本中どこからでも Quintet 投資に参加できること、などがメリットとなる。

マッチングアプリのマッチング機能についてみると、参加希望者は、年齢、希望する投資金額、投資経験の有無、リスク許容度などを入力し、AI の利用により、方針や条件が近い人同士をマッチングする仕組みとする。また、本人確認や一定の責任確保を行うため、Quintet 投資の開始には、利用者の個人情報や口座番号を登録することを必要とする。

この Quintet 投資は、投資の初心者が投資を始めやすくするものであり、このため投資金額は、数万円程度の比較的少額なものとならざるを得ない。それを使って、単元株（100 株）単位で売買しようとする、金額的には限界がある。このため、1 株単位で株式を売買することができる「ミニ株」の仕組みを使って投資を行う（すでに各証券会社がサービスを提供している）。投資の

経験を積むためには、まず市場に入ってみることが重要であり、1株単位であってもまず売買してみることが必要であると考えたためである。

マッチングアプリには、さまざまな機能を付けることとする（図表 5、図表 6）。1つ目は、メンバー間で、銘柄選択や投資のタイミングなどについて情報交換を行うことができる「チャット機能」である。この機能を使えば、メンバー同士で気軽に相談ができる。議論や相談をしてから投資を行うことで、メンバー間での意見のすれ違いをなくすとともに、情報交換を行うことで初心者でも投資先を選びやすくなることが期待できる。2つ目は、先輩投資家と相談をすることができる「メンター機能」である。Quintet 投資の利用者の多くは、投資の初心者になるとみられるため、先輩投資家に相談ができる機能をつける。ここで先輩投資家を効率よく集めるためにメンターになってくれる先輩投資家には、売買手数料の割引などのメリットをつけることでメンターを集める。3つ目は「ランキング機能」である。このランキング機能は、グループごとに投資収益率によってランキングをつける機能であり、目に見える形でランキングをつけることによって、収益率を競うインセンティブを持たせるという狙いがある。4つ目は「金融学習機能」である。投資を行ううえでの参考となる金融や経済に関する解説記事やコラムをアプリ内で読んで学習する機能を追加する。金融の知識が深まれば、投資への意欲も高まることとなろう。

6. Quintet 投資のメリット

Quintet 投資は、以下の3つのメリットを持つ。1つ目は、投資を始める「きっかけができる」ことである。アンケート結果では、投資を行わない理由として、多くの人が「きっかけがない」ことを挙げている。Quintet 投資では、複数人で始めることができるグループ型投資という形で、仲間の存在により投資のきっかけを作ることができる。2つ目のメリットは、資金にさほど余裕がない人でも「少額で投資が始められる」ことである。Quintet 投資では、1株単位で投資を行うことができる「ミニ株」を利用することにより、少額で投資を始めることができるようにする。3つ目のメリットは、「分散投資ができる」ことである。Quintet 投資では、1年の運用期間を経て、最終的には5人の損益を合算する「損益合算システム」を採用している。このシステムにより、分散投資の効果を出して、リスクを抑えることができる。たとえば、1人がそれぞれ5銘柄に分散投資をしたとすると、5人合計では25銘柄への投資ができることになり、より高い分散投資の効果を得ることができる。メンバー5人が、それぞれ異なる企業に投資を行うことにより、分散投資でリスクを減

らすことが可能となる。以上の3点が **Quintet** 投資の大きなメリットである。

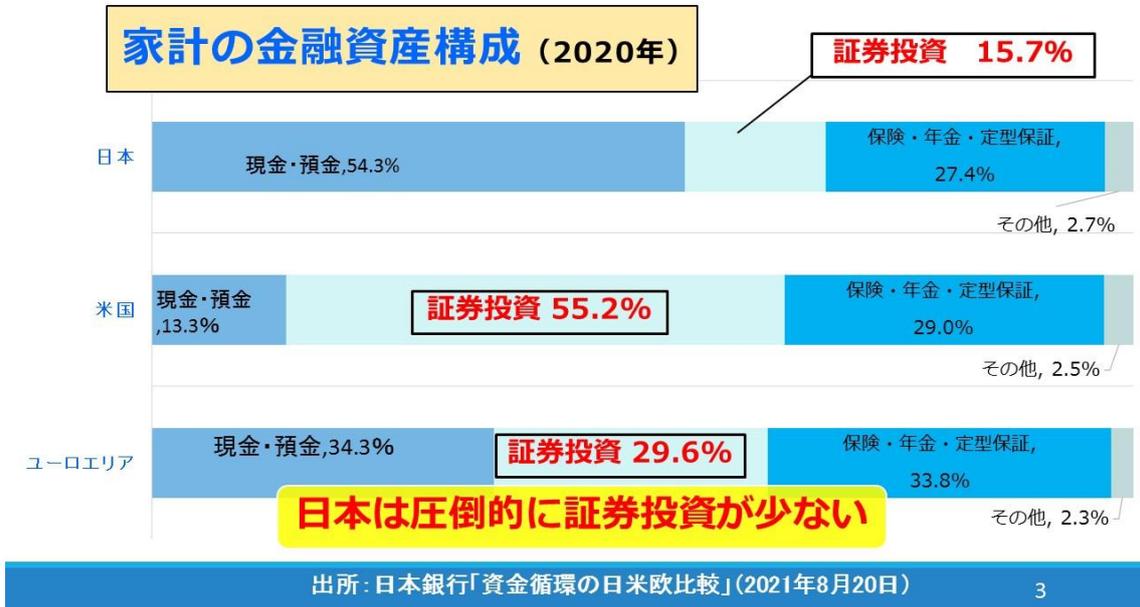
7. おわりに

現在の日本にはさまざまな問題があるが、その中でも、少子高齢化が進んでいく中で、年金制度の維持可能性や老後資金の問題は、将来的に大きな問題になるものとみられる。特に若年層にとっては、老後を安心して迎えられるようにするための十分な老後資金を形成していくことが、今後大きな課題となる。これに備えるためには、各人が証券投資によって、長期的な資産形成を行っていく必要があり、そのためにはまず「投資のきっかけ作り」が重要であるものと考えた。

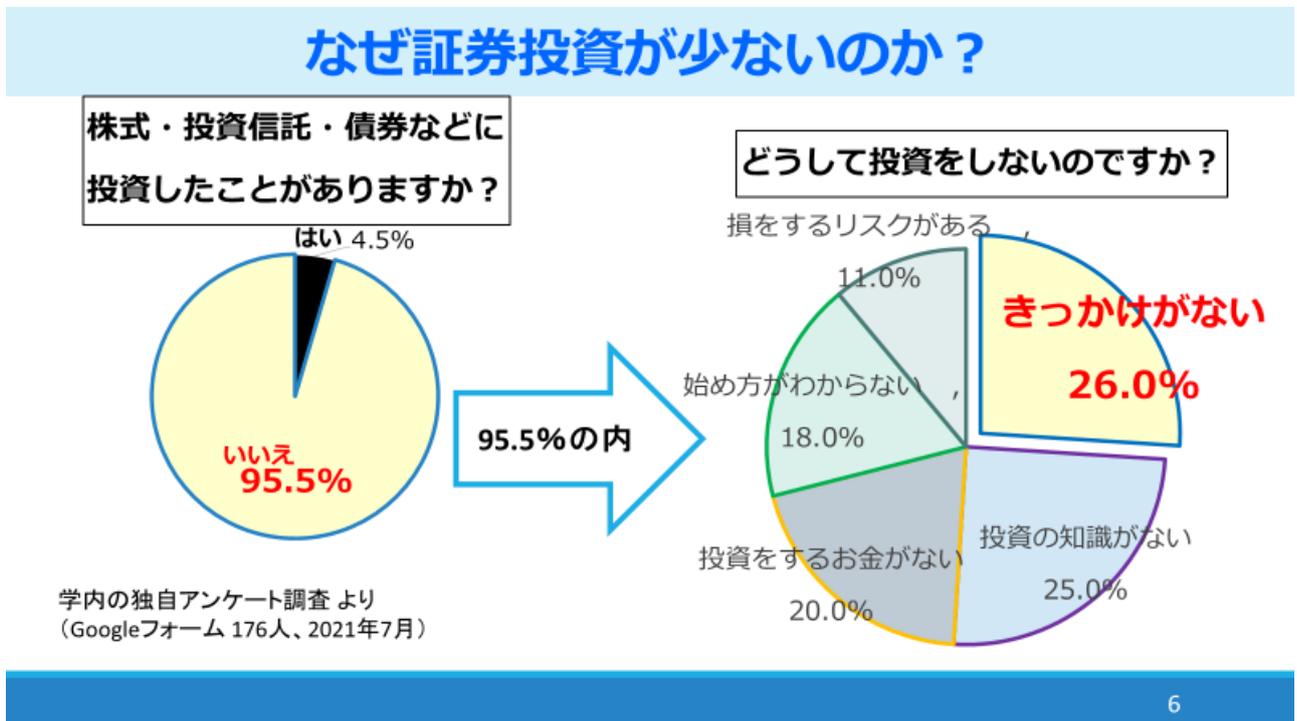
そのためには、グループで気軽に始められるようにするための「グループ型投資」をわが国にも広く普及させていくことが必要であるものとみられる。そのために、我々の提案する **Quintet** 投資では、マッチングアプリを使って効率的なグループ作りを行うとともに、ミニ株により少額で投資を行い、アプリ内の機能（チャット機能、メンター機能、ランキング機能、金融学習機能）を使ってメンバー間の知識を高め、また損益合算機能により、分散投資の効果を高めた投資を行うことを可能にすることを目指すものである。

この **Quintet** 投資が普及することにより、参加者（個人投資家）は資産形成に向けたノウハウを習得し、長い目では老後資金の確保につなげることができる。一方、こうした仕組みを運営する証券会社では、投資初心者が本格的な投資家に育ち、顧客が増加することによって、自らの事業にプラスの影響を与えることができる。最後に企業では、投資家が増えることで、株式を発行した際の資金調達がしやすくなるを考える。このように **Quintet** 投資が普及することで、投資家、証券会社、企業の三者が良い方向へ向かう「三方よし」の明るい未来の実現へ向かうもの考える。

図表1 家計の金融資産構成の国際比較



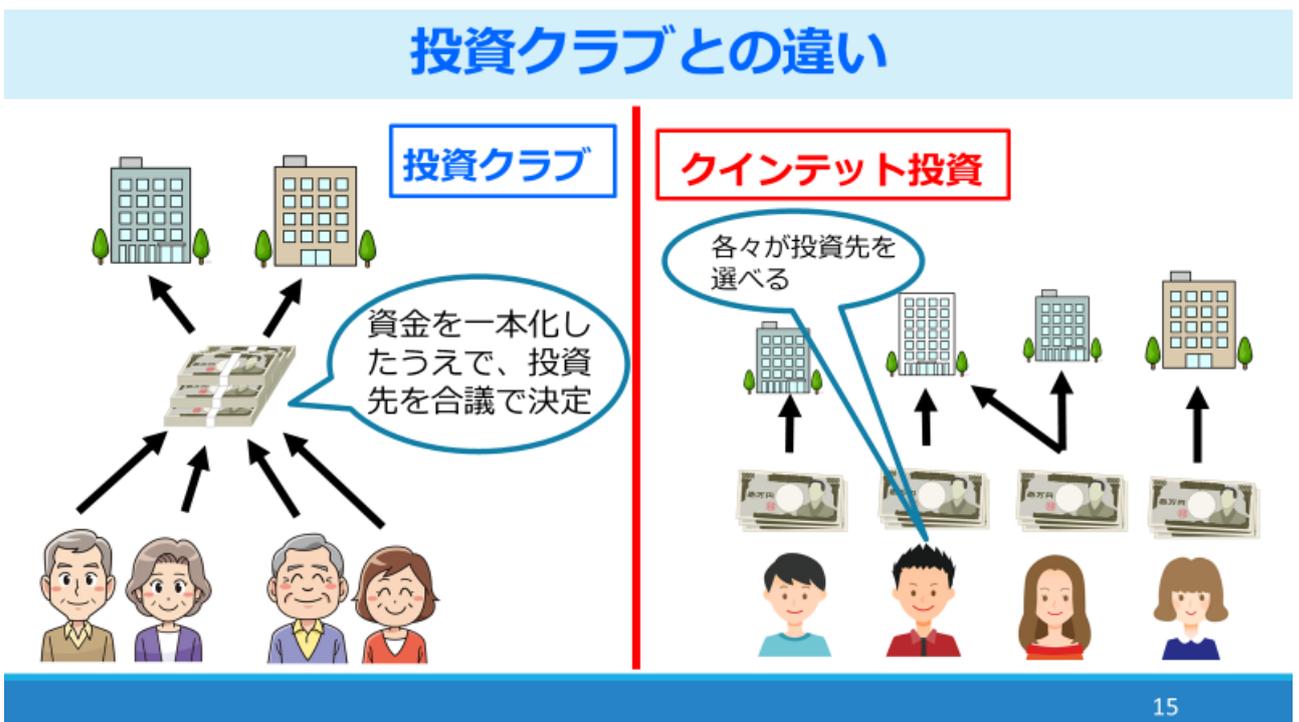
図表2 投資をしない理由 (アンケート調査)



図表3 投資クラブにおける投資の流れ



図表4 投資クラブとクインテット投資の違い



図表5 アプリの付加機能（チャット機能、メンター機能）

アプリの付加機能 ①

＜チャット機能＞

・メンバー間で相談できる機能

グループA

〇〇株はどうでしょうか？

いいと思います

同業他社を調べてみれば？

＜先輩投資家とのメンター機能＞

・投資の経験者に相談できる機能

〇〇さん

〇〇社を考えています。アドバイスをください。

〇〇社は、すでに割高で、あまりお勧めしないよ。

ありがとうございます。

23

図表6 アプリの付加機能（ランキング機能、金融学習機能）

アプリの付加機能 ②

＜ランキング機能＞

月間ランキング	
	＜チーム損益＞
1. ▲ チームA	+100,000
2. ▼ チームB	+90,000
3. ▼ チームC	+75,000
4. ▲ チームD	+40,000
	⋮

＜金融学習機能＞

〇〇社と〇〇社が経営統合へ

PERとPBRを学ぼう！

24

【参考ウェブサイト】

- ・金融審議会 市場ワーキンググループ報告書「高齢社会における資産形成・管理」
(令和元年6月3日)「最終アクセス日 2021年10月25日」

https://www.fsa.go.jp/singi/singi_kinyu/tosin/20190603/01.pdf

- ・日本銀行/資金循環の日米欧比較 :

(2021年8月20日)「最終アクセス日 2021年10月25日」

<https://www.boj.or.jp/statistics/sj/sjihq.pdf>

- ・日本銀行/資金循環統計 : 「最終アクセス日 2021年10月25日」

<https://www.stat-search.boj.or.jp/>

- ・「日経マネー」「若者の投資ブーム」(2021年6月2日号)「最終アクセス日 10月28日」

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGD242YB0U1A520C2000000/>

- ・Investopedia ADAM HAYES 「Investment Club」

(2020年11月6日) : 最終アクセス日 2021年10月20日」

<https://www.investopedia.com/terms/i/investmentclub.asp/>